

3つのカフェの重層的展開が生み出す、 新しい文化と地域コミュニティ

社会福祉法人 天童福祉厚生会（山形県）

住 所 〒 994-0071
山形県天童市矢野目 150 番地

T E L 023-653-3071

U R L <http://meikouen.or.jp/>

経 営 理 念

- ◆人格・尊厳・自由を尊重し、安らかに、ゆたかに、自分らしく暮らせる生活を支援します。
- ◆ホスピタリティー（おもてなしの心）を大切にご利用者が満足を得られる高品質なサービス提供に努めます。
- ◆地域と市民のニーズに即したサービスの提供に努め、地域社会の一員として価値ある役割を果たします。

**事 業 内 容
及 び 定 員**

特別養護老人ホーム（100名、80名、29名）3か所
ショートステイセンター（18名、16名）2か所
デイサービスセンター（35名）2か所
認知症対応型デイサービスセンター（12名）1か所
ケアプランセンター 2か所
ヘルパーステーション 1か所
在宅介護支援センター 1か所
地域包括支援センター 1か所

収 入

①社会福祉事業	1,272,856,680 円
②公益事業	73,306,000 円
③収益事業	円

（法人全体）
平成 29 年度決算

職 員 数 212 名（非常勤含む）
（法人全体）

**当 面 する
経 営 課 題**

- ・次世代経営層の育成
- ・特養老朽化に伴う、整備計画
- ・経営ビジョンの策定（中長期計画の策定）

3つのカフェの重層的展開が生み出す 新しい文化と地域コミュニティ

山形県天童市 社会福祉法人天童福祉厚生会 明幸園地域支援室



カフェのマスコット
Mちゃん

特養ホーム等を経営する社会福祉法人が、地域の福祉課題解決の方法、場としてカフェを開設。《居場所》としてのコミュニティカフェ、《人と地域》を変える認知症カフェ、《共生》への眼差しとしてのコミュニティカフェ。3つのカフェの水平展開がもたらす重層的なしかけと、新しい地域づくりの実践。

I 取り組みの目的や背景

《天童市の高齢化率等》

- 高齢者数は18,053人で、高齢化率は29.1%（平成30年7月末）
- 平成7年時点では高齢化率16.7%、平成26年には26.0%に上昇、約4人に1人が高齢者。県内市町村の中では、3番目に低い高齢化率
- 今後、高齢化率は2025年までに4.9ポイント上昇し、33.2%に達し、おおよそ3人に1人が高齢者になると推計
- 私たちが事業展開の拠点としている生活圏域（小地域・ドミナント）における高齢化率は27.0%

当法人は理念の一つとして「地域と市民のニーズに即したサービスの提供に努め、地域社会の一員として価値ある役割を果たす」と謳っています。施設ケアや介護事業といった制度内サービスで完結することなく、施設の敷居をなくす取り組みをすすめています。

地域コミュニティの場や居場所、行事等が減少し、高齢者の引きこもりや社会的孤立（ソーシャルキャピタルとよばれる社会連帯や相互の信頼感、社会的つながりが脆弱になった社会状況を表現する社会的孤立こそ隠れたソーシャルエクスクルージョンであろう）が生活課題となり、また認知症ケアパスにおいて軽度認知障害（MCI）や認知症初期の人の「初期のケアの空白期間」をつくらないための地域資源が必要とされていること、当法人の共生型サービスの実践から障害のある人もない人もともに生きる共生社会推進のための取り組みが一層求められていること等が当該取組の背景です。




明幸園の前景

それら地域の福祉課題解決のひとつの可能性として、私たちは「カフェ」というサードプレイス（オルデンパーク）の役割に注目し、カフェが多様な人々の交流拠点となり《つながり》を作り強め、認知症や障がいの社会的包摂をはかり、新たな文化を生み出す場となるよう、コミュニティカフェ・認知症カフェ・ユニバーサルカフェという3つのカフェを重層的に展開しています。

II 活動内容

【コミュニティカフェ】

平成27年11月より隔週の日曜10時～13時、日曜休館のデイサービスセンターを会場にオープンしています。カフェの名前は「コミュニティカフェ割田分校」。この地は明治の頃より尋常小学校の分教場があったところです。地域の歴史の文脈を大切にしたいという思いからネーミングしました。カフェタイム（おしゃべり）をベースに特にプログラム化はせず、地域の有志をインストラ



**コミュニティカフェ
割田分校**

◆基本データ

オープン	2015年
開催日	隔週 日曜
時間	10:00～12:00
場所	明幸園デイサービスセンター
参加費用	無料 会場に募金箱あり
参加予約	不要
参加要件	だれでも参加可能
参加者数	●毎回50人から70人
メニュー	コーヒー、紅茶、緑茶等 菓子、手作り一品料理

クターにストレッチ体操や創作活動メニューも取り入れています。毎回近隣の方を中心に50～70名の参加があり、地域自治会との共同イベント時は120名を超える皆さんが集まります。小さなお子さんから学生、シニア層等多彩なボランティアの協力もあり地域の大切な場所となっています。自分の居場所を失いがちな高齢者や子育て真最中の親たちにとって欠かすことのできない地域参加の場、身近な地域でつながりを深め気軽に立ち寄り集まることのできる賑わいの場として地域に定着しています。



セラピストによる体操指導



毎回子供たちも遊びに来てくれる。カフェの人気者



責任者の挨拶。毎回、有益な情報提供を行う



募金箱

コミュニティカフェ
「割田分校」

9月は
3回開催

9月開校日

OPEN▶10:00~13:00

9月2日①
天童の昔話を予定しています。天童とん話の会の三浦様をお招きし、人の心に語りかける昔話をさせていただきます。

9月16日②
お菓子作りを行います。一緒にお菓子作りを楽しみましょう。

9月30日③
アクセサリー作りを予定しています。自分の好きなカラーを選びオリジナルのアクセサリーを作ります。

会場/明幸園デイサービスセンター
参加費/無料(事前申し込みは不要) 駐車場あり
企画運営/社会福祉法人天童福祉厚生会 明幸園地域支援室
お問い合わせ/023-653-3071

カフェのチラシ、次回のお知らせ

【認知症カフェ】

平成28年4月より、月1回第1土曜日13時から15時の地域交流スペースを会場にオープン。カフェの名称は「Mカフェ」。オランダのアルツハイマーカフェや宮城県仙台市の「土曜の音楽カフェ」をモデルとした、オープンな認知症カフェです。カフェタイム、ミニ講話、ディスカッション(Q&A)といった定型化した構造による安定感が特徴のダッチスタイル。認知症当事者、家族、介護者、地域住民、専門職等30~40名の参加があります。認知症カフェの目的は認知症の人の社会的包摂を図ること、認知症の疾病観を変えること、認知症の人が住みやすい社会と地域に変容し寛容な地域コミュニティを作ること。対話を基盤とした、人と地域を変えていくためのカフェといえます。不定期ながらMカフェ主催のセミナーも開催し、認知症カフェの研究者、先駆的認知症カフェの運営者、フィールドワーカー、認知症当事者等を招き、認知症カフェの開設支援、



認知症カフェ Mカフェ

◆基本データ

オープン	2016年
開催日	毎月第一土曜日
時間	13:00~14:00
場所	特養明幸園地域交流スペース
参加費用	無料 会場に募金箱あり
参加予約	不要
参加要件	だれでも参加可能 オープンスタイル
参加者数	●毎回30人から40人 ●認知症の人、家族、地域住民、専門職
メニュー	コーヒー、紅茶、緑茶、ジュース類
音楽	CD

情報発信を積極的に行っています。

また、平成29年度山形県認知症サポーター活動活性化事業の県補助の交付を受け（現在は自主事業）、認知症カフェ「Mカフェ」を拠点とした認知症サポーターのスキルアップ講座&オーガナイズ事業を展開。応援者から支援者としての活動へとつなげられるよう、実践力の向上・サポーターの組織化を支援し、現在スキルアップ講座を受講した方々がMカフェの運営ボランティアとして活動しています。

平成30年8月には、*認知症カフェモデレーター研修にMカフェ運営の中心メンバーが参加しています。

*オランダアルツハイマー協会 Training Gespreksleider Alzheimer Café 日本版/認知症介護研究・研修仙台センター監修

◆認知症カフェを始めるときのリーフレットから

わたしたちが認知症カフェ『Mカフェ』を始める8つの理由 2016年

その1 可能性への共感

認知症の人とその家族へ、私たちができることは何だろうか。制度内の、フォーマルなサービスだけでなく、気軽に集い交流を楽しむ場。もの忘れや認知症の進行が気になりはじめた人の戸惑いや不安を受け止め、家族同士がピアアシストの関係を築くことのできる（ピアサポート）場所。そんなことを考えていた私たちには、「認知症カフェ」の可能性がとても魅力的なものに思えました。

その2 増え続ける認知症の人

日本の65歳以上高齢者の4人に1人は認知症またはその予備軍といわれています。高齢化の進展に伴い、認知症の人はさらに増加し、高齢者人口増加がピークをむかえる2025年には、認知症患者は約700万人（約5人に1人の割合）に達すると予測されており、認知症の人や家族の抱える深刻な課題が浮き彫りとなり、社会全体で支え合う仕組みづくり、認知症の人が認知症とともによりよく生きていくことがで

きる環境整備が急がれます。

その3 新オレンジプランとわたしたち

2015年、厚生労働省は関係府省庁と共同して「認知症施策推進総合戦略（新オレンジプラン）」を策定し、認知症の人の意思が尊重され、できる限り住み慣れた地域のよい環境で自分らしく暮らし続けることができる社会の実現にむけた様々な取り組みを行っています。特別養護老人ホームを運営する私たち社会福祉法人は、多くの認知症の人を受け入れ、認知症ケア探究の一端を担ってきました。私たちは、サービス提供を通じて出会った多くの認知症の人と同じ数だけ、不安や戸惑いと混乱、その家族の悲しみと落胆に向かい合ってきました。地域全体での認知症ケア推進にむけ、社会福祉法人の持つ機能と役割を発揮することが求められています。

その4 ミッション

わたしたち社会福祉法人は、古くから社会福祉事業の主たる担い手として活動している民間法人であり、経験、専門人材、施設・設備を多く有している経営主体です。非営利法人として制度や市場原理では満たされないニーズに応えること（地域における公益的な取り組み）が、私たちのミッションです。

その5 ケアの空白期間

地域の望ましい認知症ケアパスにおいて、軽度認知障害(MCI)や認知症初期の人、要介護認定を受ける前、また要介護認定を受けてもすぐにはサービスにつながらないなどの、「初期のケアの空白期間」をつくらないための地域資源が必要となっています。

その6 認知症カフェ前史

認知症カフェのルーツは、1997年オランダで始まったアルツハイマーカフェといわれています。その後イギリス（メモリーカフェ、ディメンシアカフェ）やヨーロッパ各国、アメリカなどに広がります。日本では、2000年代に「認知症カフェ」が京都などを中心に始まり、2012年オレンジプラン（認知症カフェ開設を後押し）により全国にカフェ開設が急増することになります。では、それ以前の先行実践はどうだったのでしょ。認知症カフェ前史。1980年には「呆け老人をかかえる家族の会」（現公益社団認知症の人と家族の会）が誕生し、各地に広がった活動「つどい」はいわば日本型認知症カフェといえるものです。また80年代以降NPO活動の普及と都市化を背景に展開されるようになったコミュニティカフェの一部は高齢者・障がい者の保健福祉的要素を内包していきます。こうした歴史の水脈を私たちは大切にしたい、草の根。

その7 当事者の思い、同時性と重なり

オーストラリアのクリスティーン・ブライデン、彼女は1998年*1『私は誰にな

っていくの? (Who Will I Be When I Die?)』という本を出版し、認知症当事者が置き去りにされている状況に異議を唱え、認知症当事者の立場から積極的に発言しました。認知症の初期は、忘れていくことへの恐怖と恥ずかしさ、「霧につつまれて生きる」ようだ。自分が自分でなくなっていく恐怖の中であってさえ、彼女は力強く続ける。私たちは患者ではなく、認知症と共に生きる旅路を歩む一人の人間です。共感し、苦を共にし、支援してください。深いところでつながり、この旅路を歩むことを可能にしてくださいと。

同じ年、日本では精神科医小澤勲が自身の著書*2『痴呆老人からみた世界—老年期痴呆の精神病理—』の冒頭、「痴呆老人からみた世界はどのようなものなのだろうか。彼らは何を見、何を思い、どう感じているのだろうか。そして、彼らはどのような不自由を生活しているのだろうか。」と記した。クリスティーンと小澤の重なり、交錯、不思議な同期。そのあとに続く多くの認知症当事者の発言は、私たちの心を揺さぶり、認知症を生きる彼、彼女たちをいきいきと照らしはじめました。

*1 日本では2003年邦訳出版クリエイツかもがわ

*2 1998 岩崎学術出版社

その8 サードプレイス

都市社会学者のオルデンバークは*「家庭でもなく、職場でもない、第三の居場所」を指して「サードプレイス」という概念を提唱しました。自宅(ファーストプレイス)や職場・学校(セカンドプレイス)とは異なる居心地の良い三番目の場所、サードプレイス。ヨーロッパのカフェやパブといったサードプレイスでの会話が人とつながりや理解、帰属意識をみだしコミュニティの形成をすすめる、インフォーマルな公共の集いの場という概念。

*オルデンバーク著『サードプレイス 原題 The Great Good Place』2013 みすず書房



Mカフェ、今日の音楽はピアノ生演奏

認知症の人と共に暮らす地域づくり
 明幸園プレゼンツ Mカフェ・セミナー2017
 講演「土橋カフェ」からの報告
 2017.10.1日 10:00-12:00

1 基調挨拶
 2 講演「土橋カフェ」からの報告
 3 オープン・ディスカッション

お申し込み方法
 1 FAXでお申し込みの場合
 2 申し込みページからお申し込みの場合
 3 電話でお申し込みの場合

セミナーチラシ

認知症サポーターの皆様に講座を開催
 認知症カフェを拠点とした、
 認知症サポータースキルアップ事業
 認知症カフェ
 11/25 (土) 12/16 (土)
 1/13 (土) & Mカフェ
 2/17 (土) 3/17 (土)

時間 1-2・4-5回 13:00~14:30
 3回(Mカフェ) 13:00~15:00
 対象 認知症サポーター
 認知症の人を支える活動に携わる方
 参加料 無料

申し込み先
 TEL (023) 653-3071
 主会/福/天童福祉厚生会 明幸園地域支援課

フォローアップ講座チラシ

【ユニバーサルカフェ】

平成 29 年 2 月より不定期開催。ユニバーサルカフェでの出会いと交流を通じて、障がいや障がい者に対する理解促進・啓発を図るとともに、様々な講演会を開催するなどゆるやかな学びの場として、また障がい者の地域生活の支援の場、社会参加活動の促進の場、地域連携の拠点となることを目指しています。カフェタイムを基本にプロ、アマチュアによる音楽コンサートや地元大学のボランティア



障がいのある人も ない人も ユニバーサ ルカフェ

- ◆基本データ
- オープン 2017 年
- 開催日 不定期
- 時間 10:00~12:00
- 場所 特養明幸園地域交流スペース
- 参加費用 無料
会場に募金箱あり
- 参加要件 だれでも参加可能
- 参加者数 ●毎回 80 人から 100 人
●当事者、家族、地域住民、
専門職
- メニュー コーヒー、紅茶、緑茶、
ジュース等

アサークルによるワークショップを取り入れたプログラム構成とし、障がいのある人もない人も多様な参加者の交流がカフェ内で繰り広げられ、毎回 100 名前後の参加があります。

「富山型デイサービス」のセミナーでは実践者による支援の日常と、様々な相乗効果を生み出す可能性について報告いただき、地域のニーズに柔軟にこたえることができる多機能性と、サービスにおける多様な人間関係が居場所や役割につながる富山型デイサービスの魅力が、参加者の深い共感を呼びました。



カフェ常連の皆様

障がいのある人もない人も
互いに、そのらしさを認め合いながら
ともに生きる地域社会を目指して

明幸園の
ユニバーサルカフェ
オープン

「ユニバーサル」は、障がいのある人もない人も、互いにそのらしさを認め合いながら、ともに生きる地域社会を目指して開催する。ユニバーサルカフェは、障がいのある人もない人も、互いにそのらしさを認め合いながら、ともに生きる地域社会を目指して開催する。ユニバーサルカフェは、障がいのある人もない人も、互いにそのらしさを認め合いながら、ともに生きる地域社会を目指して開催する。

2017 2/26(日)	2017 3/12(日)	2017 3/26(日)
<p>13:00~14:15 ◎講演「障がいのある利用者の皆さんに伝えられて」 講師 赤上 隆 氏 社会福祉法人聖徳会理事長 日本知能障害福祉協会理事 （聖徳会創立 100 周年記念） を中心に、障がい者支援施設・グループホーム・就労支援施設・生活介護事業所・地域生活支援センター等を運営。障がいのある利用者様が地域で暮らし、活躍する取り組みを行っています。</p> <p>14:15~16:00 ◎ユニバーサルカフェ Vol.1</p>	<p>10:00~12:00 ◎ユニバーサルカフェ Vol.2 + 映画「工作ワークショップ」 講師 富山県立大学 ワーク「つながり」のみな この日のテーマは、富山県立大学の学生によるワークショップです。参加者から、障がいのある人もない人も、互いにそのらしさを認め合いながら、ともに生きる地域社会を目指して開催する。</p>	<p>10:00~12:00 ◎講演「赤十字からお年寄り支援で、共生社会の実現報告」 講師 藤田雅子 氏 NPO法人にぎやが（富山県） NPO 法人にぎやがは、障がいのある人もない人も、互いにそのらしさを認め合いながら、ともに生きる地域社会を目指して開催する。ユニバーサルカフェは、障がいのある人もない人も、互いにそのらしさを認め合いながら、ともに生きる地域社会を目指して開催する。</p>

会場 明幸園地域交流スペース（富山市矢野目 150 特養ホーム明幸園内）
駐車場あり・入場無料・カフェ無料・事前申込不要
明幸園のホームページ URL: <http://www.meikouen.or.jp>
このイベントは、平成 28 年度は明幸園の障がいのある人もない人も共生社会推進委員の協賛で開催
企画運営/社会福祉法人聖徳会 明幸園地域支援室
問い合わせ TEL023-653-3071

ユニバーサルカフェのポスター

Ⅲ 活動の成果

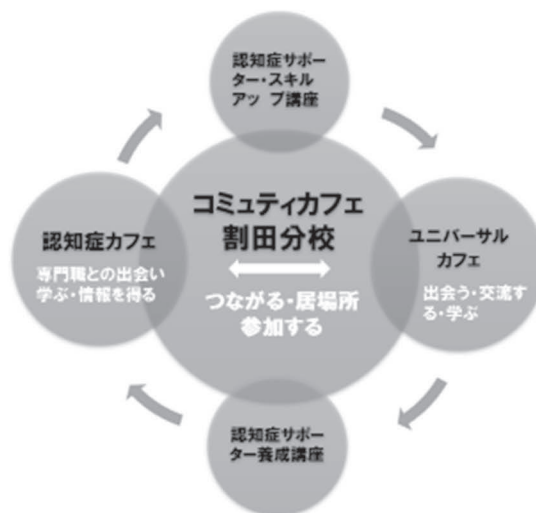
① 地域の福祉課題解決のひとつの可能性としカフェという装置に着目し、続けています。継続することで、まさにしみこみ型の学びのようにゆっくりと時間をかけて、オープンな対話と交流が広がり、《つながり》が進展し地域の新しい可能性の気づきをもたらし、認知症、認知症の人、障がいの社会的承認の場としてのカフェが形成しつつあると実感しています。

② 3つのカフェの重層的展開と循環関係。

1つのカフェが動き出し、広がり、つながり相互に影響し合う。コミュニティカフェの利用者の一部は軽度認知障害の人、自然に認知症カフェに誘ってみる。認知症カフェの目的である情報提供や学びといったことに関心があり参加された地域の方が、コミュニティカフェにも参加するといったように相互に関係しあう。多世代間のだれもが心地よい時間を共有する事で、その眼差しから認知症や障がいに対する価値観も変化しているのを感じています。

3つのカフェに通底するもの、それは新しい文化を生み出す可能性です。年長いても、認知症になっても、障がいを持っていても、人としての価値は変わる事なく、互いに敬い、支え合い、安心して暮らすことができるやさしい寛容な地域コミュニティをつくること。これこそが、これまで地域に育まれた私たち社会福祉法人が取り組むべきことのひとつです。

3つのカフェの重層的展開



③ これらの公益的な取り組みは、運営に当たる職員の専門職としての成長の機会であり、本来事業に大きく豊かに還元されています。施設の敷居を限りなく低くしていこうとする職員の努力は、自然とアウトリーチという従来の課題

を乗り越えるきっかけにもなっていると感じています。また、公益的取組として今日的福祉課題に取り組む法人の姿は、学生の関心を集めやすく人材確保という観点からも副次的な効果があると考えます。

IV アピールポイント

わたしたち社会福祉法人は、古くから社会福祉事業の主たる担い手として活動している民間法人であり、経験、専門人材、施設・設備を多く有している経営主体。非営利法人として制度や市場原理では満たされないニーズに応えること（地域における公益的な取組み）が、私たちのミッション。3つカフェは地域の総合相談窓口としても多様な相談にも応じる機能を持っており、カフェの重層的展開は様々な方々の関心を集めています。私たちの取り組みから、同様の、さらにはもっと魅力的なカフェが開設されることを期待します。

誰も差別されたり排除されたりしない相互共生的な社会の構築、ソーシャルインクルージョンにむけ私たちはとびきり居心地のよい場所と新しい文化の苗床を目指して、活動を続けます。